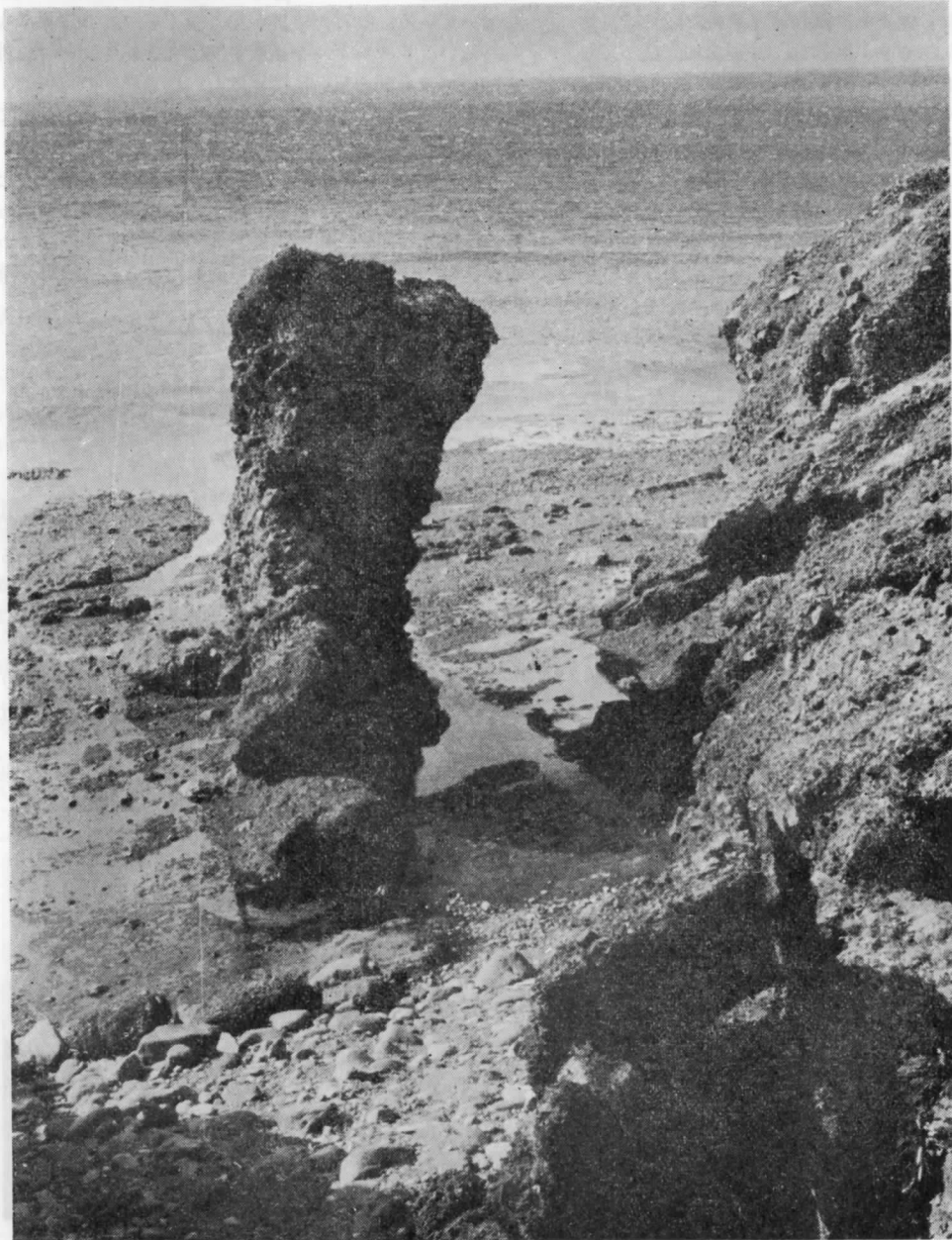


山と博物館

第4巻 第8号 1959年8月25日 大町山岳博物館



風船岩

北海道の端 知床岬にある奇岩「風船岩」と云う面白い名前がついている。

福島博撮影

知床半島を探る (1)

ハイマツの中の10日間

C 隊 高橋 秀 男

横浜市立大学探査会は同大山岳部の協力を得て、去る7月15日より2週間にわたり、朝日新聞北海道支社の後援で、秘境としてその名も高い夏の知床半島の縦走と学術調査を行なった。調査隊は福島博助教授を隊長に、総勢33名で、山岳部、探査会、医学部、特別参加隊員からなり、計画に従って、A、B、C、Dの4隊に編成された。

一行の先発隊4名は9日夜札幌に着き現地交渉を行ない、本隊は15日東京芝浦棧橋を出発、18日早朝釧路に上陸、18日午後には全員羅臼(らうす)の誠諦寺に集結した。19日に行動を起し、A隊は羅臼岳、硫黄岳を経てルサ川源流へ、B隊はウナキベツ源流を廻り稜線より知床池へキャンプを出しC隊を助け、更にルサ川源流をめざす。C隊は最難コース知床岬より知床岳まで縦走しB隊と合流する。D隊は海岸沿いに調査を行なう。これ等の計画は全て28日に成功裡に終了し、夏の知床半島全山縦走の初記録がつくられる一方、調査面でも、福島隊長の下等生物をはじめ、動植物4000点の資料収集の成果を収め、今後の研究に大きな期待が寄せられている。

私はC隊に特別参加隊員として加わり、動植物の収集にあたったが以下「夏の知床」見たまま、聞いたままの紀行である。

あるグラフに、今日本に秘境と名のつくものがあるならば、ここ知床はまさしくその名にふさわしい地であるという。この秘境へと旅だつたのが16日、私と丸山、一戸隊員は船の都合上汽車で一路最果の国、最果の町をめざしていた。青函連絡船は「北海道ブーム」と云われる観光客で賑わい、年々増加の傾向にある観光地北海道の姿に思いが馳せた。函館より札幌、釧路、標茶、標津へと汽車の旅は長いが、車窓に展開される海、山、湖といったところ観光的要素をもつた大自然は旅情を慰めるには充分であつた。

エゾならではの見られぬ、植物景観、大規模な原始林、泥岩層の湿原、広漠たる草原は牧歌的な、いやヨーロッパ的な情緒をかもし出さずにはおかない。標津については18日10時30分、すでに船で到着していた本隊と合流し、自衛隊の十輪トラックに2トンの荷物を積み、2台の自動車に分乗し、海岸沿いにホコリをかぶつて走つた。羅臼に着いたのは4時頃。空はどんよりと今にも雨が降りだしそうであつた。車の振動でグロッキーになつたが、再び元気を出し、荷分けを行ない個人装備のバックキングをし、明日への準備をした。

先発隊の聞き込みの話や誠諦寺の和尚の話では、さかんに「知床恐るべし」を強調する。岬はウルシが多くア

レルギー性の人は充分気を使つた方が良く、ブヨ、蚊、ダニ、アブなどにハイマツ、ササのブッシュがととてもひどい、全道のヒグマの3分の2は知床半島に生活の根拠をおいている。これだけ聞いても全くアフリカ探検にも劣らない、ジャングルや猛獣を想像するが「ヒグマ以外を除いては人間の生命に関係はないから成功の可否は、諸君等の実力にかかっている」とは北見営林局長の言であつたようだ。

今調査隊のいる羅臼町、ちなみに高等地図帳をひもといてみよう。ソ連領クナシリ島が長く根室海峡に横たわり、北海道の西端は根室半島、北に知床半島がのびている。その知床半島の根室海峡に面したところに港町、羅臼がある。

ハー 遊覧船の旅なら知床岬
夢のパノラマ ホシソレソレ君を待つ
招く白百合 がんこうらん
呼ぶは赤岩 夫婦滝 夫婦滝
サアキタキタキタシヤントキタ
羅臼サツテモ 良いせな

これは観光地としてデビューした羅臼町の羅臼小唄である。それでも知られざる町といえよそれまでであるが、羅臼を有名にした事件がある。本年4月漁船沈没15死者89人、空前の漁船大量遭難は明治41年4隻が遭難32人が死亡、それ以来の事件であつた。

遠くは敗戦直前の人喰い事件、今も羅臼の人々の語り草として、その名残をとどめ、知床半島のベキンの鼻近くには人喰い岩がある。

知床はシル(大地)エトク、すなわち岬という意味で、羅臼の語源は「クマヤシカをとると必ずここで殺して処理した場所」というアイヌ語からきており、語感が



知床岳附近より硫黄岳



知床半島地図

知床岬に行くC隊

らは不気味なものを感じられるし、またラオスといえど外国をも思わせる。

羅臼村は全村約7000人、市街地だけなら2000人、旅館を数えた人は6軒もあつたといひ、映画館、パチンコ屋、バー、食堂など目につき、ただ無かつたのは薬局だけだそうである。それだけに隊員はへんぴな町を連想していたのである。完全に釘づけされた家が多い。夏の間、昆布とりに半島へ家族ぐるみ出稼に行くため、年間の生活費は昆布でまかなわれ、豊作の時には40万円位の収入がある。この後にはイカ釣りもある。9月から12月にかけては石川、富山、函館、釧路などからイカ釣りの船が何百もこの町をめざして来、船員、季節労働者、取引商人などが加わつて一躍人口一万人にふくれ上り、町通りは銀座なみ、人でゴッタ返すという。だから旅館の多いのもうなずけるし、交通の不便なことにもよるだろうが、これ等荒稼ぎの人々を相手の商売も、案外物価の高いのも不思議ではないように思われた。

もう一つ羅臼の町で書かねばならぬことがある。それはハシトガラスが人間なみに生活していることである。町のいたるところの騒音はカラスの鳴声で、大木に群がるカラス、お寺の屋根でガサガサするカラス、道路や庭で遊ぶカラス、カラスに明けカラスに暮れるといつても過言ではない。話がカラスに及べばつきることをしらない。

登山者のザックのタッシュから食糧を持出したり、ゴミ捨に来るのを待つているカラスから、八百屋の店先の卵を上手にくわえて持つて行つた話さえある。だから生活には絶えずカラスのことを念頭において行動しなければ、せつなく貴重な食糧などメチャメチャにされるこ

とも稀ではない。

19日 起床5時、相変らずふりしきる小雨の中を予定通り、B、C隊海運丸(14トン)に乗船6時30分出発した。半島の海岸沿いにB隊はウナキベツまで、C隊は知床岬までいくのである。半島の海岸は雲が低くたれ、眺望は全くきかない。晴れていたならばクナシリ島、知床半島の山々は素晴らしいだろうに。羅臼港から一時間もしたころ、だいぶ天気のようにも良くなり、海岸沿いに点在する番屋、懸崖、奇岩が美しい。

ウナキベツでB隊は上陸である。船長が大声で呼ぶと、番屋からイソ舟が櫓さばきもあざやかに海運丸めがけて進んで来る。

大きくゆれるイソ舟は時々波に見えかくれするので心配顔で見守っていたが、荷物と人間を2回にわたつて運搬し終つた。隊員とは知床池で会うことを約束して別れた。

残るC隊は竹端リーダー、藤沢、伊吹、山形隊員に私。岬まで福島隊長、朝日新聞本多記者、共同TV松下カメラマンが同行した。

風は強いがようやく晴れた海上にウミネコ、ウミウが船上を飛びのどかな北国の海である。船長が指さす方角を見るとサメが2、3水しぶきを上げている。

その下には1000頭もいると聞いてびつくり、氷山の一角なのである。ペキンの鼻、赤岩、ローソク岩など、その形に似せつけられた奇岩を知り、岩礁の上に一頭だけ昼寝をしていたアザランを眺め、おだやかな日本の最北端の海にいることに、はかりしれない喜びを感じた。岬には、いたるところ岩礁があり、容易に舟の接近を許さないで、グッと岬を大きくまき、オホーツク海側に面する。岬より少し登路(うとろ)側によつたその昔アイヌの文吉と云う人が住んでいたという「文吉湾」につける。みごとな風船岩のかなた、オホーツク海は青く晴れ渡り、遠くスカイラインがすつきりと眺められる。「文吉湾」は浸蝕された懸崖に囲まれた小さな入江で番屋一つなく、海岸性の植物ハマエンドウ、ハマペンケイソウなどが咲いている。海岸より岬の台地にでた。この台地



ヤブ蚊に防虫網を使う

想像以上に前進は容易でなく、オニシモツケ、チシマアザミ、エゾシシウド等みな背丈以上の巨大な植物が密生しており、ときどき開けたところにはヒグマが草の根をほりかえしたあとがある。無駄な浪費をさけるために荷を置いて、適当なB・Cをさがすために福島隊長等が偵察に出た。やがてアブラコ湾に一軒の番屋をお願いしてくる。番屋は段丘を下つた海浜で、粗末な木造で夏の間(2・3日前に来たばかり)昆部の解禁とともに訪れ、秋までここで生活するのである。我々はまだ昆布が来ないのでその置場に陣どつた。午後は採集班と偵察班に別れて行動に移る。

シコタンハコベ、エゾイブキトラノオ、エゾトリカブト、シロヨモギ、アサギリソウなど、手にふれるもの、

目に入れるもの全て北の国ならではの見られぬものが多いだけに、採集に無我夢中である。またガンコウラン、ハクサンチドリ、ヨツバシオガマ、ミヤマシヤジンなどは北アルプスでは高山にしか見られない植物がここでは海岸にみごとなお花畑が発達している。私の胴乱や、サブザックはたちまちのうちに一杯になつてしまった。採集品が多かつたばつかりに、その日の整理には長時間かかつてしまった。

オホーツク海に赤々と沈む太陽で、お花畑はバラ色に映え、入江の奇岩は黒々とし、風と波の音に少なからずドラマチックに感じた。

明日は荷物をデボし、再びB・Cに帰る予定である。

(つづく) (山博芸員補)

ウナキベツ川を行く

B隊 丸山 晃

肌寒い。上衣の袖をおろす。霧雨が音もなく降りしきる中を海運丸(14トン)は深くたれこめた雨雲の底に煙る。柔らかく濡れた知床の山々を横にしながら進む。時折、数十米の断崖が砕ける雲の隙間からのぞく。岩肌の白い幾条かの流れはウミウの射出した糞だろうか。ウナキベツ川沖で同乗して来たC隊、E隊と別れ、ハンケに分乗、上陸する。

われわれの隊はウナキベツ川を廻り、ポロモイ台地にキャンプを進め、知床岬より来るC隊をサポートするために編成された隊である。ウナキベツ川の河口は深くきりたつた岩壁にはさまれて、知床の水を押し出すごとく白浪を海にはきだしている。雨上りの根室海峡を隔てて横に長く、細く延びるのはソ連領クナシリ島。視界をはみだしてなお、ヴァオレット、ブルーの島影が延びる。どこでつぎるのかわからない。ウナキベツ川を何度も渡渉しながら登る。細長くのびたハンノキの林立する中をはい、背をうめる強靱なオオブキを倒し、かきわけて進む。ザックと左腕にはさんだ胴乱は身動きを自由にさせてくれない。トクサが一面においしげる窪みで一息つくと、そこは後で考えてもゾーとするような場所。トドの背推がころがつている。トクサの枯葉が横たおしになつて踏みつけられている。土地の人が入るはずもない場所。あの大きな茶褐色のヒグマがハット目をかすめる。トドはキツネが食べたのか。ここは二度と通らなかつた。荷上げに下つた時も、荷下げに降りた時も、そして撤収し、下山する時も。ウナキベツ谷は昭和10年にポロモイ台の一角が崩れ落ち埋められた幾重かの起伏のある横に広がつたなだらかな谷で、流れは何度か伏流になつて、崩壊の後も生々しい、鋭利な岩石の積み重なつた下を突抜けてやがて赤茶けた盛り上りをほうように進み、又いつか消え伏せてしまう。両側に迫るオオシラビソヤダケカバは鬱そうとして近よることを拒んでいるかのよ

うだ。事実そこはヒグマ、キツネ、イタチなどの巣窟なのである。時折、いや一日に何度か、この疎らにしかミヤマハンノキの群叢をつくつていない。赤茶けた起伏も水求めてか、谷を越えて鬱そうした茂みに向うためか、30cmもあるヒグマの真新しい足跡がこともなげに真昼の日陽しに影を落している。思い切りホイッスルをビリビリッと吹き鳴らす。と100mほど先をキツネが後を振りむき、振りむき、長い房々した尾をひるがえして逃げ去つて行く。イワブクロの青紫の花が寄りそうように風にゆれている。



根室海峡海運丸上にてプランクトンを採集する丸山隊員

この谷には大小5個の池がある。崩壊によつてせき止められたのだろうか。上高地のように枯木が立ち、裏磐梯の五色沼のごとくスカイ・ブルーに色づいている。浮いていたエゾサンショウウオの幼生が身をひるがえして、落葉で埋れた底に沈んで行く。石をとり上げて裏がえしにすると緑色の大きなヒルがはえずついている。池の向う岸はあの暗い原始林が覆いかぶるように押し寄せている。絶え間なくピリピリッと鳴らす。

ベースキャンプはこの赤茶けた谷のノドに設けられた。ここからヒグマの爪あとが生々しく残るヒグマ平を恐る恐る通り抜け、ウナキベツ川の急峻な源流を100mほどはつたザイルをつたつて、細い稜線にでる。ベースキャンプについてから3日目に、私を含めた4人はウナキベツ谷の調査のために下り、その他の隊員は、キャンプ・1の設営と道開きのため稜線に向つた。テント・キーパーを残さずに、5時にベースキャンプに着いてみると、無残な光影がいきなり目に飛び込んできた。ビニール・シートに包んでおいた措葉用の新聞紙が30cmもある大きな脚で一打にされたのがあたり一面にちらばっている。ポリエチレンビンもスチロール管も包んであるものは皆飛びだし、ころがっている。野冊は深く新聞紙の中まで食い破られているし、昨夜トラップをかけ、今朝回収し、出発前に仮剥製にした5体のエゾヤチネズミも尾と中味の脱脂綿と細かにちぎれた体毛を残して散らばっている。ホチキスビンのケースには3本の爪跡が残っている。テントは異状なかつた。ヒグマでないことはすぐわかつた。キツネかイタチの仕業だろうか。翌朝ハンプトグラスがわれわれの出発を待つかのようにアホー、アホーとテントから50m位はなれて群つていた。その日は勿論テントキーパーを2人残してキャンプ・1に向つた。

稜線の向う側のスロープはなだらかにオホーツク海に広がる。山肌を覆つたハイマツはさながら、ダーク・グリーンカーベットのカーペットである。が近づくとそのハイマツは直径30cm、長さ8m、高さ3m優に背を埋めてしまう。



ポロモイ台地の池 浮島がいくつもある



ウナキベツ谷でベースキャンプの設営をする日隊 煙のようにおしよせて来る蚊を防ぐために防虫網をかぶっている

それがギッシリ枝をはつているのである。

われわれはこれを切り開いてポロモイ台地にいたる巾2mに及ぶハイマツ・ウエイを作つた。キャンプ・1からわずかしか離れていなかったが、寺島隊員と私は採集のためにおくれてしまった。その時だつた、ウーと云う低い重いうなり声が聞えた。近くには道を切り開いてからヒグマの残した糞がある。誰かがたわむれにさざぎたてているのだろうと疑つたのが悪かつた。続けて聞えて来るうなり声はどう疑つてみてもヒグマのそれだつた。ピリピリッ、けたたましくホイッスルを鳴らし、ザックをほうりだして逃げ腰になつた。そのうちにうなり声はいつか高らかな歌声にかわつた。

ダケカバの間からポロモイ台地が見える。台地の中ほどに5つの池が水をたたえている。まわりは湿地だろうか。ハイマツの切目がよくわかる。知床へ来て始めて心温まるのを感じた。その時その台地の向うでボンッと云う高い音がした。それから間もなくして白い煙の柱が上つた。その煙は一瞬のうちにオホーツク海側から吹き寄せる風に流されて、乱れ消え去つてしまった。C隊からの連絡用発煙筒だつたのである。

ポロモイ台地には尾瀬ヶ原のような浮島のある沼が沢山あつた。丁度エゾキスゲが長い花梗を延し橙色の花をつけていたし、チシマワレモコウ、チシマツガザクラなどの咲く楽園であつた。ここでわれわれは3日間費した。この間にC隊を迎え、知床岳に登つた。

3日目に天候がくずれだした。あわただしく撤収を開始真夜中の12時までにかかつた。

ソ連領クナシリ島の探照灯が点滅するわれわれのいくつかのヘッドランプを横切つて通りすぎていつた。

(山博調査員 横浜市大生物学教室)

藨類の見分け

学芸員 平林昭一郎

(4) マゴケ科カサゴケ属の藨類

このマゴケ科は、世界で17属約2000種を産すると云われ、そのうち日本では10属(カサゴケ、ハリガネゴケ、ヘチマゴケ等)約90種と、変種約10種が知られている。

カサゴケ属にはカサゴケとオオカサゴケの2種があつて、前種は樺太、北海道、本州、シベリヤ、北米、ヒマラヤ、欧州等に、後者は本州、四国、九州、台湾、印度等にそれぞれ分布している。

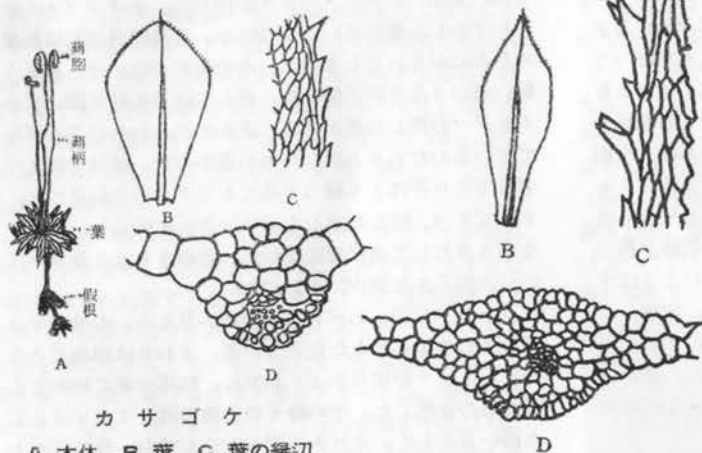
いずれも森林下の地上或は朽木上に好んで群生し壮観をていしている。和名のとおり外見が、ちょうどカラカサを広げた形に、にているためこのような名がついた。大型で大変きれいなため観賞用として、庭先などに植えられている。

大町地方ではオオカサゴケが大半で、特に居谷里水源地内の群生は美事である。

種類の見分け方は下表のとおりである。

(引用図書「日本の藨類」「日本隠花植物図鑑」「生物学大系3」)

	カサゴケ	オオカサゴケ
茎	直立 高さ 5.0~10.0cm	直立 高さ 6.0~8.0cm
大きさ	大形 長さ 1.0~1.2cm 巾 0.3~0.4cm	極大形 長さ 1.5~2.0cm 巾 0.4~0.6cm
葉形	形 倒卵円形~エビラ形 少々よじれ尖る	形 舌状
ほか	縁辺の下部は外旋して全辺上半部には鋭歯あり	せまい基部があり、鋭頭、乾けば波状にやよじれる 縁辺の上部には2列の鋭歯あり
細胞	やや大、規則正しい 長方六角形	長さ六角形
中肋の横断面	中心束、厚模細胞群あり	中心束あり、厚模細胞群なし
蒴柄	紫色 高さ 4.0~5.0cm	基部は暗赤色 上部は鮮赤色、光沢あり 高さ 6.0~8.0cm
胞子	緑色、いぼ粒形	緑色、乳頭形



カサゴケ

A. 本体 B. 葉 C. 葉の縁辺
D. 中肋の横断面

オオカサゴケ

(カサゴケAは桜井氏原図、その他は堀川氏原図)



オオカサゴケ (大町市居谷里にて)

ヒクイナ



ヒクイナの巣と卵

もうだいたいの鳥の雛が成長して親鳥と変りない位大きくなり、ツバメや気の早い夏鳥など渡りの準備をはじめるといふのに、この鳥は抱卵の最中だ。この鳥の渡来して来るのは5月初旬、それから草ののびきるまで待つて、草たけがのびきってしまった7月初旬ころから産卵期に入る。田圃の中に営巣するものも多く、稲の穂がではじめる頃が抱卵の最盛期である。巣は一株の稲を利用し、穂や葉の先等を産座に引き込んで巧に作つてあり、近くを通つてもなかなか見つけにくい。

雛はフ化した時から黒い綿毛が生えておりフ化後間もなく歩いたり泳いだりすることができる。またこの鳥のなき声は古来多くの文章や歌などにうたわれ親しまれている。

(長沢修介)

秋 の 草

大風の季節となつた。南の海には熱帯性低気圧がつきつきと日本の空をねらっている。

一日おくれのうら盆が終つた北アルプス山麓地方は、大風がおし寄せることに次第に秋色を濃くしてゆく。ごう雨を吹らし、荒しまわつた嵐の一夜が明けて、からつと晴れあがつた空からは冷たい秋の風が吹きこむ。この頃になると野山は夏の花が終つて、満開のススキの蔭に秋の花の全盛期に入る。

万葉集には秋の花をよんだ歌が数多くのせられている。その中でも、山上憶良が秋の花七種類を上手によみ込んだ歌は、秋の七草として広く知られている。

萩が花 尾花 葛花 撫子の花
女郎花また藤勝 朝顔の花

七草には春の七草と秋の七草があることは周知のところである。この七草の思想はもともと中国の風習が日本にとり入れられたものである。春の七草は野山に緑がなくなつた寒中、摘んで食べられる草がえらばれている。すなわち、セリ、ナズナ、ヨギヨウ（ハハコグサ）ハコベラ（ハコベ）、ホトケノザ（オオニタビラコ）、スズナ（カブ）スズミロ（ダイコン）の七種である。これらの野草を料理して食卓をかざり、邪気をはらつてこれから過す一年間のえんぎを祝つたものである。

一方、秋の七草はハギ、ススキ、クズ、ナデシコ、オミナエシ、フシバカマ、キキヨウの七種類で、野草の中でも美しい花をつける種類がえらばれている。山上憶良の歌の最後の朝顔は問題があつている議論されている。キキヨウのことをさすという説、ムクゲのことであるという人、またヒルガオだといつている学者、あるいは今日私たちが呼ぶアサガオでよいという説をたてる人もある。とにかく美しさを觀賞し楽しむための花がえらばれていることは間違いがない。

ハギ 一名ヤマハギ（マメ科）

北海道、本州、四国、九州、朝鮮半島、中国大陸の北部、満州、ウスリーに分布している。がくは半ばまで深く分裂しているが、よく観察すると上の2片は先が浅く裂け、他の3片は鋭くとがつたものや、あまりとがらないものなど色々な変化がある。冬になると地上部は枯れ、翌年根株から勢よく芽をふきだす。こんなところからハギは生え芽（キ）の意味であるともいわれている。

ススキ 一名カヤ（イネ科）

日当りのよい乾いた土地に群落をつくる穂状に開いた花の部分をオバナ（尾花）といつている。千島の南部、北海道、本州、四国、九州、琉球、台湾、朝鮮半島、中国大陸に分布する。

クズ（マメ科）

裏見草ともいい、葉の裏面は毛が密生して白色をおびている。密生している場所で、風を受けてひらひらす

時は美しい。茎のもとの方は本質になつて、長く地面をはつたり、木に巻きついて茂る。根はでん粉があるのでくず粉をとつて食用とし、また薬用にも使われる。家畜の飼料として知られ、北米では Kudzn-Vine の名で盛んに利用されている。

北海道、本州、四国、九州、朝鮮半島、中国大陸で見られる。

ナデシコ 一名カワラナデシコ（ナデシコ科）

日当りのよい乾いた場所に生え、河原に多いのでカワラナデシコの名がある。本州、四国、九州、台湾、朝鮮半島、中国大陸に分布する。めしべは2本、おしべは長いのが5本、短かいものが5本で、やくが花粉を散らしてからめしべがのびる。

オミナエシ 一名オミナエシ（オミナエシ科）

北海道、本州、四国、九州、琉球、台湾、朝鮮半島、満州、中国大陸、シベリヤ東部、カラフト、千島で見られる。花は径4mmばかりで粟が沢山ついたようであるので、大町地方ではアワ花と呼んでいる。

フシバカマ（キク科）

奈良時代に中国大陸から日本に入つてきた帰化植物と考えられている。本州（関東地方から西）四国、九州、朝鮮半島、中国大陸で見られ、大町地方では庭園や坪庭に植えられたものしか見ることができない。

キキヨウ（キキヨウ科）

北海道（西南部から）本州、四国、九州、朝鮮半島、満州、ウスリーに分布している。おしべは5本、めしべは一本で先が分裂している。しかし花が開いてから2～3日間は柱頭が開かず、花柱をとりかこみ筒状にくつついた5本のやくが、互いにはなれて花粉を散らしてから柱頭がいかりのようにそりかえる。

（平林国男）



白 い ツ バ メ

ツバメは夏鳥として3月下旬から4月の初め頃、都会や農村、漁村に現われる。そして人家の軒などに巣を作りはじめ5月には卵を生んで暖ためヒナが生れる。

ツバメは「二番子」まで育てる。あるいは一回のこともある。だいたい一回目の時は5~6個、二回目は4~5個の場合が多い。卵がかえつてヒナになるには第一回が15日、第二回が14日かかる。これは第一回の時の方が気候が寒い関係であると思われる。

生れてから巣立ちまでほぼ21日、21日たつと電線などにとまつているその側らに親鳥が心配そうに見守つているのが見られる。一本立になり、何んのあぶなげもなく飛べるようになるには一月半はかかる。

そしてたまにはこの写真のように「白ツ子」が生れることもある。これは病的なもので白化現象Albinismといつて特に鳥に多い。

「白ツ子」のできるのは病的な原因によつて色素ができないから起るのである。羽毛中に全く色素のない場合には羽の組織中にある無数の空泡のため光線が反射屈折され、雪や雲の白色と同じく純白に見える。鳥の中でも黒色、カッ色、灰色の鳥にもつとも多いようである。

ツバメがとつて食べる昆虫は一時間に約10匹と云われている。この割合で一羽が1日10時間働らくとすると100匹、日本に住んでいるツバメがどの位とるかにはチヨット想像できない位の数になる。昆虫の繁殖力は実にものすごいものである。何んの害も加えられずに増えて行くとまたたくまに地球上は昆虫の世界になるだろうといわれ

ている。

アメリカの昆虫学者フオブツシユ氏がアリマキと云う虫について計算したところ一匹のアリマキは一年の終りには10000000000000匹になるとい



大町市常盤区清水守人さん方の白いツバメ

つている。鳥が昆虫をとつて人を助けた話とはたくさんある。ツバメではないがここに一つ例を上げると、1847年アメリカのソートレーキ市にはじめて植民されたその翌年にイナゴの大群が来襲した。その大群は数マイルに及ぶほどの大群であつた。ところがその時数マイルはなれたところに住んでいた無数のカモメが飛来し、数日中にイナゴの大群を食べつくして植民者を救つたと全く夢のような話がある。その時のカモメに感謝するために立てた記念碑がソートレーキ市に立つている。

(千葉彬司)

友 の 会 行 事

八方研究登山が行なわれました。8月12、13日の2日間、約20名の友の会員(父兄一名参加)が参加しました。第1日目は細野からケーブルに乗つて鬼平~黒菱~コロピ石、コロピ石(1600メートル)付近でモウセンゴケ、クロサンショウウオ、モリアオガエルの観察を行ないました。午前中はくつきりと白馬三山も見えていたのですが、午後相憎雨が降りだし、黒菱小屋の中で高山植物の話の聞いたり、レクレーションをして一日楽しくすごしました。第2日目もやはり朝から雨が降つていたので野外観察手帳をもとに学習をし、午後ケーブルに乗つて大町に帰りました。雨が降つて野外観察が充分できないことは残念に思います。

お願い 本紙の購読ご希望の方は1カ年購読料1700円(郵送料とも)を現金書留または郵便替為、郵便切手で長野県大町市、大町山岳博物館あてご送金下さい。
大町山岳博物館

標本同定会が行なわれました。夏休みもようやく終りまつくりに日やけした小中学生が8月23日博物館の講堂に約50名の友の会員が集まり、夏休みに採集した植物、昆虫などたくさんもちこみ、その名前をつけてもらつたり、動物や植物の形、生活についての話、動植物の採集のしかた、おしばなど標本の作りかたの話を書き、おわりに博物館の標本室を見学して一日をすごしました。

その日に参加できなくて、おしえてもらえなかつた人はいつでも博物館へ来て聞いて下さい。このほかに、天文、気象、岩石、化石、鉱物などの研究の相談にも応じます。

山と博物館 第4巻第8号 1959年8月25日発行
発行所 長野県大町市TEL(大町)211
大町山岳博物館
印刷所 長野市岡田町176
第一法規出版株式会社

巻	頁	行	誤	正	
4・5	4	左・上・14	(誤 13 図)	(誤 12 図)	
		右・下・21	楕円状葉體形	楕円状葉體形	
		右・下・6	先端は	先端は	
		右・下・4	<i>Chionaster nivalis</i>	<i>Chionaster nivalis</i>	
		5	左・上・2	大きさは10~25ミクロン	大きさは10~25ミクロン
			左・上・5	水雪植物	水雪植物
			左・上・8	(誤 12 図)	(誤 13 図)
			左・上・9	着色雪の主要構成生物	着色雪の主要構成生物
			左・上・10	致します。	致します。
			左・上・13	その種類に反応します。	その種類により反応します。
			左・下・16	<i>Chlamydomonas</i>	<i>Chlamydomonas</i>
			左下欄6図説明文	(250 X)	(250 X)
			右・上・12	込みます(赤紫色と反り)	込みますと赤紫色と反り
			右・上・12	<i>nivalis</i>	<i>nivalis</i>
	右・下・10	種々様々の形態	種々様々の形態		
4・4	5	左・上・14	<i>lacustris</i>	<i>lacustris</i>	
		左・下・5	<i>lacustris</i>	<i>lacustris</i>	
		右・上・12	(誤 12 図)、それに誤 13 図の如き	(誤 13 図)、それに誤 12 図の如き	
4・5	8	左 誤 14 図説明文	円形は <i>Chlamydomonas nivalis</i> 細胞内にはヘマトローム色素	円形は <i>Chlamydomonas nivalis</i> 細胞内にはヘマトローム色素	
		右 誤 15 図説明文	と <i>Scotiella nivalis</i> へ	と <i>Scotiella nivalis</i> (楕円形)	
		右 誤 16 図説明文	誤 16 図 (左)	誤 16 図 (右)	
		右 誤 17 図説明文	誤 17 図 (右)	誤 17 図 (左)	
4・6	8	左・上・14	冷らしい	冷らしい。	
		右・下・9	風雪により	風雨により	
		誤 19 図説明文	誤 19 図円形は <i>Chlamydomonas</i>	誤 19 図円形は <i>Chlamydomonas</i>	
		誤 20 図説明文	誤 20 図円形は <i>Chlamydomonas</i>	誤 20 図円形は <i>Chlamydomonas</i>	
		誤 20 図 誤 21 図	20 図と 21 図の異質 (中と右の異質) を受える		